



# ふくりゅう

特定非営利活動法人  
日本下水道文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成18年10月25日  
通巻48号

## バルトンの故郷・スコットランドでの生誕150年記念事業に参加して

島田 晴人(本会会員)

英国でのバルトン生誕150年記念行事は、9月5日～10日まで、バルトンの父ジョン・ヒル・バートン(王室歴史編纂官、著述家、弁護士)の故郷アバディーン市とバルトンが生まれ育ったエジンバラ市の2都市で行われた。

訪英団は9月4日夜、アバディーン市の中心部にあるロバート・ゴードン大学宿舎に入った。アバディーンにはバルトンの祖母の家系にあたるD・パトン氏がお住まいになっている。氏は今回の記念行事のスコットランド側協力委員会の委員長を務められ、我々訪英団を温かく迎えてくださり、最後まで親身にお世話くださった。

### アバディーン

アバディーン市はスコットランドの東北部、北海油田に近く、ディー川河口にあって漁業が盛んである。近くに採れる花崗岩を使ったまちなみが重厚で美しい。古い伝統を誇るアバディーン大学や教会、博物館が整った文化都市である。

5日夜、我々訪英団のためにアバディーン大学主催の歓迎会が、タウンホールで行われた。在留邦人、留学生も集まり、会は大学副学長の挨拶、小林康彦団長((財)日本環境衛生センター理事長)の謝辞に続き、民族楽器によるスコットランドの調べを聴きながら、懇親の場もたれた。

5日、6日の午前中に2箇所の浄水場を視察した。市の郊外にあるマンノフィールド浄水場では、水道管理の責任者から公社管理のスコットランド水道の説明があり、とくに事務所間で経費削減、消費者満足度で競い合っていると話された。もう一箇所翌日訪問したのは、ディー川上流に位置し、市内から車で30分のところにあるインバァカーニ浄水場である。1866年(慶応2年)に建設された緩速ろ過が今も現役で稼働している。しかしながら、このあたりでは野生動物の糞などが原因でクリプトスポリジウムの問題が発生し、緩速ろ過では、完全にとりきれない恐れがあるので、すでに膜ろ過が導入されており、近いうちには100年以上使われてきた緩速ろ過がその役目を終えようとしている。

6日夜、アバディーン市庁舎ホールで記念行事として、展示会と記念講演会が開催された。ホール入口でバグパイプ演奏に迎えられて入場。くつろぎながら展示品(稲場日出子さんを中心に準備されたバルトンの写真、バルトンの愛娘たま子さんの日本画など)を見学したあと、記念講演会では、ロンドン大学I・ニッシュ教授が「日本

とスコットランド人物交流史」と題して日本で活躍したグラバー、ブライトン、マードック、バルトンを取上げ、時代背景を交えながら、彼らの業績を語った。稲場紀久雄教授は、「バルトンの夢～その生涯を訪ねて～」と題して、バルトンが日本人と深く関わり、衛生工学の礎を築くことで、日本の近代化に尽くした功績を熱く語られた。

講演の合間には、在留邦人による琴と吟詠、バグパイプ演奏、バルトンの玄孫ケビン・メッツさんによる津軽三味線の演奏があった。とくに、津軽三味線演奏は聴衆を魅了した。そして、高橋周平在エジンバラ総領事の挨拶、両国国旗をデザインした特製ケーキへの入刀があり、お互いに紹介しあいながら懇談に時を忘れた。

7日、アバディーンを後にエジンバラへ。途中フォース湾にかかる珍しい構造のフォース橋(1890年完成、グラスゴー大学で学んだ渡辺嘉一が設計に参画)を眺めつつ昼食をとり、スコットランドの首都エジンバラへ向かった。

### エジンバラ

岩山にそびえるエジンバラ城や石畳の市街地を巡ったあと、市郊外のヘリオット・ワット大学宿舎へ入った。

8日は、ヘリオット・ワット大学でバルトン記念環境シンポジウムが開催された。発表案件は次の4件、ほかに大学の実験室見学があった。①稲場紀久雄「真の豊かさとは人間環境～日本の伝統的思想に基づく考察」、②小林三樹「日本の水道近代化120年をふりかえって(今水道はどこへ行く?)」、③「バングラデシュ農村地域へのエコロジカル



総領事公邸で行われた晩餐会

「サニテーション導入活動」、④ポール・ジョイット（ヘリオット・ワット大学土木システム学科教授、イギリス土木学会副会長、スコットランド持続可能技術協会理事）「文明の影の部分を見据えて技術者は如何にあるべきか？」

（Engineering civilization from the shadows）であった。バルトンに根ざしたこれからの技術者のありようが論じ合われたシンポジウムであった。

その夜は、高橋総領事より、公邸での晚餐会に招かれ、楽しいひと時を過ごさせてもらった。最後には、全員で手をつなぎ、スコットランド民謡「ほたるの光」を合唱したことが忘れられない。

9日は記念行事のハイライト、記念碑除幕式に次いで、展示会、記念講演会が行われた。記念碑は、現在ナピア大学構内になっているが、バルトンが育ったゆかりの建物の前に建立された。空は快晴、バグパイプと津軽三味線の演奏に迎えられ、エジンバラ市長、パトン氏、

ナピア大学理事長、小林団長、高橋総領事の手により、テープカットがなされた。瞬間、バルトンのレリーフと碑文のあるすばらしいサンドストンの記念碑が姿を現した。関係者の挨拶が続いて除幕式修了。記念碑の前で思い思いにシャッターを切りあった。名古屋から持参した「水道水の缶詰」とお菓子をお供えし、展示会と記念講演会が行われる丘の上の大学講堂へ移動した。講演会では、ナピア大学キュービー教授が、「バルトン記念碑は学生に未知の世界に望む志と勇気を与えてくれる」と挨拶。小林団長が「バルトンの遺徳」を語り、遺志を継ぐことを表明された。続いて玄孫ケビンさんが感謝の辞を述べた後、津軽三味線で、自作の曲に日本とスコットランドの調べを即興でおり込んだ格調高い演奏を披露し、聴衆を魅了した。最後に、訪英はされなかったが、日本側企画実行委員会の委員長の労をお取りいただいた藤田賢二東京大学名誉教授のメッセージが小林団長から読み上げられた。

すばらしい成果を持って、全行事が終わりました。参加させていただき有難うございました。この記念事業に携わられた、両国の関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。とくに事務局長として細かいところまでご配慮いただいた谷口尚弘さんと、貴重な展示物の到着が遅れるなど、対応にお忙しい谷口さんを支えられた悦子夫人には感謝いたします。また、多くの展示パネルを手作りで用意された稲場日出子さんの熱意にも敬服いたしました。こうした方々に支えられて、バルトン記念行事の成功があったと今、楽しい思い出とともに思い返しております。



記念碑除幕の瞬間：写真右から高橋総領事、エジンバラ市長、小林康彦団長、パトン・スコットランド協力委員会委員長、ナピア大学キュービー理事長  
[写真はスコットランド協力委員会提供]

## 『バングラデシュ・レポート』

秋田大学 医学部 神宮大輔

私は秋田大学の4年生。趣味はバレーボールと旅行とヴィオラを弾くことです。好き嫌いは特になく、お酒は飲みます。英語はつたないです。宗教は、いちおう仏教で、ご先祖様はみんな日本人です。日本に生まれ、日本で育ち、日本人として教育を受け、日本人らしく育ってきました。大学では医学を専攻し、昨年からは法医学教室に通っています。もし、『あなたは普段何をしていますの？』と聞かれたら、間違えなく『大学生をしています。』と答えます。

7月上旬、『バングラデシュで活動しているNPOが

Study tourを企画している』という話を耳にしました。この時点では、今思えば本当に申し訳ないのですが、どのような団体かきちんと調べもせず、『バングラデシュにいける』ことと『現地で活動しているNPOを見学できる』という二つのフレーズに惹かれ、全身全霊の興味本位でこのツアーに参加したいと思い、申し込みました。

7月中旬に参加が決まりました。参加が決定してから出発まで、バングラデシュとはどのような国か、日本下水文化研究会はどのような活動をしているかをかなり調べま

した。正直、自分の知らないことだらけでした。バングラデシュにイスラム教徒が多いと知ったのもこの時です。そんな基本的なことも知りませんでした。エコ・サニテーションの考え方に触れたのもこのときが初めてです。Pit-Latrine やエコサン・トイレについても。

8月19日深夜。バングラデシュのダッカ空港に着きました。降りた瞬間にアジアに特有の熱気を感じました。飛行機から降りた人、空港で働いている人、出迎えの人、みんなバングラデシュ人。話している言葉も、おそらくベンガル語。ここがバングラデシュか、と思いました。空港からホテルへの道中、車窓から見た夜のバングラデシュは神秘的でした。ネオンはなく、街灯もあまりなく、多くは屋台の裸電球の明かり。静かな縁日という感じです。

8月20日、この日から一週間、本格的に活動が始まりました。各村でのエコサン・トイレの使用状況調査や村人たちとのディスカッション、現地のNGOとのミーティングなどをこなしていきました。21日には下水文化研究会とパートナーの政府機関が主催した国家規模のセミナーを見学させてもらいました。どの人たちも情熱と持って、積極的に活動していると感じました。

バングラデシュで出会った現地の人たちの多くは、とても気さくな方でした。好奇心いっぱい、日本のことを質問してきたり、自分たちの家族の話をしてくれたりしました。

たくさんの子供たちにも出会いました。幼いながらも働いている子もいました。この国では子供も重要な労働力のようです。水汲みや魚釣りを手伝っている小学生くらいの子供。バナナやマンゴーを売っている子。みんな一所懸命働いています。売り子に限らず、どの子供たちも外国人が珍しいのか、歩くと付いてきます。カメラを向けると待っていましたとばかりにポーズを決めます。とっても愛らしいです。

食事はカレーが基本。日本人にとっての米がこの国ではカレーです。スパイスの効いたカレーにナンやチャapati、ご飯をつけて食べます。絶品です。この一週間いろいろなバリエーションのカレーを、毎日、食べました。自分は思ったよりもカレーが好きだと知りました。そして、もしかしたら、『日本はいろいろな国の文化を受け入れ、また、それを自国流にアレンジするのが得意。』という話は本当かもしれないとも考えました。

旅行という点から見るとバングラデシュは刺激的で、国民性も穏やかそうなので、旅行しやすいと思いました。ただ、NPOという点で見るとバングラデシュという国で、日本人という『外人』が活動することは大変そうです。自分が考えていたよりもずっと。たとえば、言葉。バングラデシュで出会った現地の人たちとの会話は英語でした。彼らの



知識人犠牲者の碑（ブッディジビデール・ショビド・ミナル：ダッカ市西部、ブリガンガ川辺）の広場で。現地の人たちに囲まれ、恥ずかしい。

発音はrの音に独特の訛りがあり、初めは若干聞き取りづらいです。もしかしたら、僕が訛っていたのかもかもしれません。語彙力の差も、ときに感じます。

仕事に対する考え方にも違いがあるのではないかと感じました。この国の人たちはややのんびりしています。買い物をするとき、食事をするとき、航空券を買うとき etc どの場合も待ち時間は日本の倍以上です。現地の人にそのことを話したら、『そういう人たちは、仕事はいつかは終わるから、焦る必要はないと考えているのだよ』と教えてくれました。たしかに、従業員の立場に立ったらこの考え方もありな気がしますが、サービス業などの分野でこの考え方はありなのか？と感じました。少なくとも日本でこの考え方が通るのは『寅さん』の世界や釣りバカ日誌の『浜ちゃん』が働いている会社くらいだと思います。

最後に、医学生立場からバングラデシュの現状について感じたことを報告します。

私はAAN（アジアヒ素ネットワーク）の現地駐在、対馬さんの紹介でダッカのバンガボンドウ・シーク・ムジブ医科大学院を見学しました。衛生観念の違いなのか、ナショナルクリニックであっても滅菌した機材を未消毒の素手で触れるところにおいてありました。これで手術をしたら、術後合併症の危険は、高いです。また、廊下に乞食がいたり、お見舞いと思われる方が廊下でつばを吐いたことにびっくりしました。衛生観念はその国の習慣と深くかかわっていると思います。牽いては健康増進や経済発展にもつながると思います。その観点から見て、トイレという最も身近で土台的ポイントから衛生状況改善にアプローチすることは大変有意な方法だと思いました。

一週間しか滞在できなかったのも、自分の感じたことが本当に事実を反映したものかどうかは自信がありません。ただ、バングラデシュに行き、NPOの活動の一部を体験できたことは本当に貴重な経験でした。また、すこしだけ、『日本』について考えることもできました。とてもすばらしい研修でした。

お忙しい中、今回の活動に同行させていただき高橋さん、酒井先生、萩原先生ご夫妻、坂本先生、大変お世話になりました。また、自分のために病院見学の手配してくれたり、夕食までごちそうしていただいた対馬さん、本当にありがとうございました。



コミラ（ダッカから東へ約100km）のモイナマティ仏教遺跡にて、ここからインド国境は近い。

## 第37回 定例研究会

## 「ロンドンの下水道とバザルゲットの業績」報告

平成18年10月5日(木)、東京・飯田橋の東京ボランティア・市民活動センターで第37回定例研究会が開かれました。今回のテーマは「ロンドンの下水道とバザルゲットの業績」です。西欧の下水道事情に精通しておられる齋藤健次郎氏(現日水コン顧問、元建設省)に、特にお願いをしロンドンの下水道事始についてバザルゲットに焦点を絞って話していただきました。

ジョセフ・ウィリアム・バザルゲットは、永井久一郎や森鷗外の書いた文章にその名前が記されていますが、一般にはあまり知られていない人です。「ロンドンの下水道の父」といわれた土木技術者です。1819年にロンドン郊外で生まれ、30歳で民間のコンサルタントから首都下水道委員会に転職します。この頃のロンドンは、尿尿を下水道へ強制的に流入させた施策が裏目に出て、テムズ河の水質汚濁、コレラの大流行が起き、その対策が議論されていました。

1850年にチーフ・エンジニアに就任し、さらに首都事業

委員会の設立とともに、こちらのチーフ・エンジニアになり、1859年からいよいよ、彼の大きな業績である、テムズ河の両側に幹線下水道を建設し、下水をロンドンにまで逆流しないはるか下流にまで遮集する事業を開始しました。途中、幾つかの中継ポンプ場を設けましたが、自然の勾配をたくみに利用した自然流下式の管渠です。南岸系統は1865年に、また北岸系統は1868年にそれぞれ稼働しています。この事業の完成によりコレラの発生は激減しました。

しかし、この遮集方式は、あくまでも未処理での下水放流であったため、テムズ河の河口域が水質汚濁に悩まされることになり、1882年、王立首都下水道処分委員会はついに未処理放流を禁止しました。そして、下水は沈殿処理し、汚泥は海洋投棄することになりました。

55歳の時、ナイト(卿)の称号を授かります。70歳まで勤め、その2年後に死去しました。享年72歳でした。

(地田修一 運営委員)

## 「ごみの文化・尿尿の文化」の出版記念会が開かれました

去る8月5日(土)、本会の分科会である尿尿・下水研究会が廃棄物学会・ごみ文化研究部会と共同編集した「ごみの文化・尿尿の文化」(技報堂出版)の出版を祝う会が、東京・水道橋の水道会館会議室で開催されました。参会者は、武藤暢夫氏、八木美雄氏、溝入茂氏などの執筆者のほか、両研究会の会員など30余名。

午後1時30分より本会の小松建司氏の司会のもと、小巻慎編集長らから出版の経緯について説明があった後、記

念講演会が行われました。まず、龍谷大学の占部武生教授が東京都の清掃研究所で活躍された先人の業績を話され、続いて、発展途上国における尿尿処分について、東洋大学の北脇秀敏教授から問題提起がなされました。

刊行された本の即売も上々で、講演終了後の懇親会では技報堂編集長への新たな出版企画が話題に上るなど、昨今の出版不況などどこ吹く風の盛り上がりでした。

(地田修一 運営委員)

## 尿尿・下水研究会第42回例会(「銀輪で集めたマンホール蓋のデザイン」)報告

平成18年9月8日(金)18時30分より、東京・飯田橋の東京ボランティア・市民活動センター会議室で「尿尿・下水研究会の第42回例会」が開かれました。今回のテーマは「銀輪で集めたマンホール蓋のデザイン」。趣味のサイクリングの途上、路上で見つけた下水道のマンホール蓋をデジカメで撮り続けて10数年の、石井英俊氏(東京都下水道局)にパソコンを駆使して整理・分類されたコレクションから、厳選したほんのサワリの100種類ほどのものについて解説していただきました。

マンホールの模様は元来滑り止めのためのもので、せいぜい下水道管理者としての市町村の紋章をアレンジする程度でしたが、近年、それぞれの自治体のご当地ソングとしての地方文化を発信・アピールする媒体として位置付けられ、そのデザインが競われています。また、カラーマンホールも結構見受けられるようになりました。

技術的にも複雑なデザインを型どることができるようになり、サイクリングをしていますが、この町にはどんなデザインのマンホール蓋があるのか期待しながらの路上ウ

オッチングになるとのことです。距離を稼ぐサイクリングではなく、マンホール蓋のデザインを収集することが目的になってしまったとのこと。

それでは、当日紹介されたデザインの中から、サワリのサワリを以下に。

**祭り・伝統行事編**；花火(古河)、凧揚げ(見附)、大綱引き(上尾)、幌獅子(石岡)、角兵衛獅子(月湯)、御柱祭(諏訪湖流域)など

**風景・名所**；浅間山(軽井沢)、大菩薩峠(塩山)、矢切の渡し(松戸)、霞ヶ浦と帆掛け舟(土浦)、太平洋と日の出(大網白里)など

**歴史・建造物・名物**；時計台(札幌)、ハクチョウ(水原)、クジラ(昭島)、飛行機(所沢)、ぶんぶく茶釜(館林)、遣欧使節船(石巻)、伊豆の踊り子(天城湯ヶ島)、太平記の里(千早赤阪)など

**ジョーク**；ツバメ(燕)、カラス(烏山)、サガ九つ(草津)など

(尿尿・下水研究会幹事 地田修一 記)

## Center for Alternative Technology (CAT) 訪問記

酒井 彰(本会代表)

9月10日訪英団の一行とガトウィック空港で別れ、独りウェールズを目指した。目的は、Center for Alternative Technology (以下 CAT) を訪問し、水を使わないトイレについて技術交流をすること、人口は少なくとも決して衰退していないまちをこの目で確かめることであった。空港で皆さんと別れ、まずウェールズ中部、北部方面のターミナル、ユーストンに12時30分ごろ到着。CATに一番近い町マハンレスまでの往復切符を買い、時刻を確かめたところ、この日は日曜なので、到着は夜10時過ぎという。一応ダイヤはインターネットで調べてはいたが、平日のダイヤを見ていたようだ。普段なら乗り換え1回で4時間ほどで着くはずなのに、日曜だと、ユーストン発が4時半で、それからでも乗換え2回、6時間かかる。慣れぬこととはいえ最初からたいへんな目にあってしまった。

マハンレスは、ウェールズ最初の首都だそうだが、今の人口は2000人をわずかに上回る程度。2番目のウェールズ訪問目的にぴったりだ。列車が少ないせいか、途中までは席を探すのに苦労したが、さすがにマハンレス近くではがらになり、駅を降りたのは一人だけだった。でも、まちには人通りはあるし、ホテル兼パブのなかはまだにぎやかだ。着いたホテルでも年配の方が多く、数人がまだグラスを傾けていた。CATの人に紹介されたホテルは1780年築、廊下は狭く、スーツケースを自分で運ぶのはひと苦労だったが、電話しておいたら、食事を用意してくれた。長い一日がやっと終わった。

翌朝はタクシーでCATへ。バス、自転車で来れば入場料割引とうたっているが、どのバスに乗って、どこで降りたらいいか人に聞いてもわからない。マーカスさん(Biologyの責任者)と約束しているといったら入場券無しで入れてくれた。入り口では、がけを水力で上る列車が目に入る。自己紹介とお茶の後、コンポストトイレと下水処理を詳しく見せてもらった。コンポストトイレはし尿分離も行われているが、中に蜂の巣ができていて使えなかった。下水処理は勾配と生物を使っているのでエネルギーはかかっていない。かなり多段で最後は植物をそだてている。CATには、子供から大人までを対象とした、自然や

環境を学ぶために滞在型の研修コースがいくつも用意されている。今は、新しい建物が工事中で、下水処理の方も増設の必要がある。下水処理で使う系列の変更や日常の操作はすべて手動だが、あまり手間がかからない工夫がされている。タンク類もセメントをできるだけ使わない方針でレンガ造りである。

その後、マーカスさんの部屋で、私たちが行っているバングラデシュのプロジェクトについてパワーポイントで説明。コンポストを考えると何らかのエネルギーが必要になるので、ただ乾燥していることについても技術的に納得してもらえた。約3時間付き合ってくれた。夕方マハンレスへ送ってもらうことにして、午後のはのんびりCATのなかを見学することにした。

CATは1972年に有志がこの地に集まりスタートした。地球環境うんぬんが言われるずっと前から、石油に代わるエネルギー、自然資源の利用と保護を目指してきた組織である。午後の見学に際して音声説明装置を貸してくれた。聞こえてきたのは日本で会って、今回の訪問をお願いしたピーターさんの声だった。彼はCATのオリジナルメンバーであり、我々の生活から排出するCO<sub>2</sub>を大幅に削減するためには、何人かの先駆的な行動が必要だということをも日本での講演で述べていたが、ここでの活動に裏打ちされた主張であったのだと納得できた。

昼食はレストランで自然食。厨芥のコンポスト化をすすめているので、食材も自給自足なのかと想像していたが、一部の野菜を除いてそうではないらしい。コンポストで育てているせいか、瓜類など巨大に思えた。この日も小学生の団が訪問していたし、平日なのに駐車場もほぼいっぱいだった。子供連れの若い人も少なくない。展示物も工夫が凝らされていて子供たちも楽しそうだ。

まちへ戻り夕食までの間、町を散策。古いまちなみがあるまま残り、時計塔を中心にした落ち着いたまちだ。若い人も歩いているし、車も多い。広い公園もある。レストランもお年寄りを含めた家族連れでかなりの席が埋まっている。

翌日はスランゴレンというウェールズ・イングランドの国境に近い小さなまちを訪れた。いくつも見所があり、観光客が少なくない。そのひとつにイギリスで有名なカナル(運河)が水道橋のように谷を渡るころがあり、そこを訪ねるボート・クルーズに乗った。歩くよりゆっくりしたスピードで、反対に進むボートが来ると何分も待たねばならないが、そういったことを承知で、何日もカナルで旅を楽しむのはまさにスローライフの極みだと思う。そんなボートに乗りながら、ロンドンへの列車の時刻ばかり気にしていた自分が情けない。

ウェールズはぜひ訪問する機会を作ってゆっくりと訪れたいところだ。



マハンレスのまち



谷を渡るカナル

## 第44回尿尿・下水研究会例会のご案内

下記の要領で第44回尿尿・下水研究会の例会を行います。ふるって参加してください。

記

日時：平成18年12月1日(金) 午後6時30分より

講師：松田旭正 氏(本会会員)

演題：「船の便所に関する話題」(仮題)

場所：東京・飯田橋の東京ボランティア・市民活動センター B会議室(セントラルプラザ 10階)

TEL 03-3235-1171、交通 JR・地下鉄飯田橋駅下車1分

関西支部主催 講演会・パネルディスカッションのご案内  
テーマ「水環境と生き物」

日時：11月11日(土) 13時～17時

場所：大阪市立中央青年センターA棟3F2号室

大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL 06-6943-5021

主なプログラム：

基調講演「水環境と生き物」 13:15～14:45

龍谷大学教授 遊磨正秀

パネルディスカッション

「水環境から生き物を考える」15:00～17:00

パネラー

龍谷大学教授

遊磨正秀

大阪市都市環境局理事

光岡和彦

NPO野生生物を調査研究する会理事長

今西将行

関西トンボ談話会事務局長

谷 幸三

植彌加藤造園(株)、

吉野浩樹

コーディネーター

本会関西支部運営委員

山口征宏

参加費：無料

懇親会：17時30分～、パル法円坂(会場の隣)にて

会費2000円

後援：大阪府、大阪市

協賛：関西水環境ネット参加団体

※ 本事業は定例研究会として開催いたします。

※ 詳しくは、本会または関西支部ホームページを参照ください。なお申込み締切りが過ぎておりますので参加ご希望の方は、関西支部 [k-atsuhi@kcn.ne.jp](mailto:k-atsuhi@kcn.ne.jp) または電話 06-6972-0071 まで連絡願います。

## 多くの方から協賛・寄付をいただきました。

昨年度会費納入に併せて多くの方から寄付をいただきました。また、今年度賛助会員各位へお願いさせていただいた海外技術協力活動への協賛金にもご賛同いただきました。ここにお名前を掲載し深謝申し上げます。【敬称略】

協賛金(18年度)：中川ヒューム管工業(株)、(株)日水コン、日本上下水道設計(株)；合計200,000円

寄付金(17年度)：秋葉誠、朝倉恒夫、麻田幹彦、池田勝、池田親治、石井明男、石川旭、伊藤陽二、伊藤東洋雄、稲場紀久雄、稲場日出子、稲村光郎、上原義昭、上山堅義、大澤佳子、大歯亮一、大庭克世、大山明、奥田照夫、小澤宣雄、嘉田由紀子、片桐幸義、金成英夫、鎌田修、亀田宏、河井竹彦、川下好則、川田賢治、河村清史、川村直道、河原長美、甘長准、神吉和夫、菅家啓一、杵島亮治、北川知正、木下哲、木村淳弘、栗田彰、栗林栄、高坂嘉勝、児玉琢郎、小寺武夫、小林三樹、小林りょう、駒林行弘、小山豊一、齋藤博康、酒井彰、酒井泰、櫻井克信、笹尾圭哉子、佐々木邦夫、笹部薫、佐藤八雷、佐野廣一、重岡慎哉、重松

正義、柴田尚、渋谷四郎、嶋田隆雄、島田晴人、清水慧、鋤柄修、杉戸大作、杉山博夫、鈴木直子、関野勉、添田廣滋、高島昭俊、高橋栄吉、高橋敬一、高橋澄、高橋宏昭、高橋洋一、武島繁雄、竹島正、武田篤夫、田中重穂、田中亮、棚橋都、谷口孚幸、谷口尚弘、玉井義弘、玉木勉、樽井吉郎、地田修一、靄理恵子、寺前美須男、中川右近、中越哲男、中西弘、中西正弘、中野年弘、中村正雄、中村幸雄、中山義一、成原富士郎、西堀清六、西村伸一、沼野良介、野崎圭吾、長谷川清、八田宏、濱宏、原正博、東重雄、氷上克一、平田純一、平野栄一、廣田公治、福田寛允、福田欣宏、福智真和、藤岡祐子、藤田俊彦、藤本忠利、藤森正法、舟田英俊、古澤裕、保坂公人、星英次、星野章作、堀江信之、前田正博、政比呂志、枡本匡央、松井聖道、松田旭正、松永端静、松永喜芳、水落元之、宮川和則、村岡治、森下典昭、森島治雄、森田英樹、柳井憲司、柳下重雄、柳田哲雄、山口征宏、山地弘、山田明仁、山出康洋、山野寿男、山村尊房、吉岡等、米田孝【五十音順】

合計298,000円

## ふくりゅう 通巻48号おもな目次

バルトンの故郷・スコットランドでの生誕150年記念事業に参加して	1
バングラデシュ・レポート	2
第37回定例研究会「ロンドンの下水道とバザルゲットの業績」報告 「ごみの文化・尿尿の文化」の出版記念会報告 尿尿・下水研究会第42回例会報告	4
CAT訪問記	5

## 運営委員会・事務局より

● 会費納入のお願い(再)：本会は会員の皆様に納めていただく会費で活動を行っています。その会費を未納の会員には、再び会費請求書を送らせてもらいます。早急の支払いを切にお願いいたします。なお、請求書の送付と入れ違いにお支払いいただいた方には失礼をお許し願います。

編集後記 バルトン生誕150年記念事業はスコットランドでの記念碑建立というハイライトを含め成功裏に終わりました。イギリスへ行かれた際は是非エジンバラまで足を伸ばして、訪ねていただきたいと思います。時間があれば、鉄道での移動をお奨めします。ただし、日曜日の場合は時刻表をよく調べて。少し丘を登れば、エジンバラのまちと海が一望でき、バルトンがこういう環境で育ったのだと思いを馳せることもできます。▶そんなすばらしいところに建立を了解していただいたナビア大学、交渉にあられたパトンさんをはじめスコットランド側協力委員の方々に感謝しなければならぬと思います。そして、この交流をどのように続けていくのか、その継続のために本会はどのような役割を果たしていくのか、これから考えていくことも求められていると思います。(酒井 彰)

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会

〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館3F

TEL &amp; FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご覧ください

<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>関西支部 <http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsuhi/>